太宰府人物志

資料室だより ㊸

安楽寺別当安能

別当とは安楽寺（太宰府天満宮）の寺務を統括する最高の職のことで、代々菅原氏から選任されました。安能は菅原在長の子で、仁安2年（1167年）に別当となります。

この安能は平氏と非常に近い関係にありました。そもそも平氏政権は大宰府とつながりが深く、平清盛とその弟頼盛が大宰大弐を歴任し、そのうち頼盛は当時の慣習に反して、実際に現地まで赴任してきました。これは、平氏の日宋貿易への興味を背景としたもので、宇佐宮の大宮司であった宇佐公通や、有力府官であった大蔵種直を権少弐に任官することなどを通じて、大宰府掌握に努めたとされます。清盛は千部会という法要のために肥前国牛嶋荘60石を安楽寺に寄進しています。九州の中心地大宰府に所在する安楽寺を平氏が重視していたことの証拠でしょう。

治承4年（1180年）、清盛は都を福原に移します。この遷都には、海洋に基盤を置いた西国国家を樹立しようとした清盛の意図の表れであるとする説があります。そして、この時、福原に所在した安能の別業（別荘）が摂政近衛基通邸に設定されています。つまり、平氏と繋がりの深い福原の地に安能の別業があったということです。安能自身の平氏との関わりの深さを示すエピソードです。なお、安能が別当に任命されたのは、頼盛が大宰大弐として大宰府に下向してきていた頃のことでした。当時、比叡山延暦寺は対外貿易の拠点として安楽寺の末寺化を企図し、朝廷に働きかけを行っていました。安能の別当就任は、延暦寺の要求を排除し、安楽寺を平氏の影響下に置くことで対外交渉の窓口にしようとしたものであろうと言われています。

文治元年（1185年）、平氏は壇ノ浦合戦において滅亡します。翌年には、安能が平氏の勝利を願って祈祷を行ったとして、源頼朝は朝廷にこのことを調査するよう申し送っています。頼朝は以後も再三安能の改替を要求しますが、同6年、安能が没したことで決着がつきます。平氏といい頼朝といい、権力者に重視された安楽寺の姿を見てとることができます。

市史資料室　朱雀　信城